

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第 61 号
2025 年 12 月

目 次

[2026 年度研究大会]	
2026 年度研究大会企画について	
犬塚 元	1
研究大会プログラム（予定）	5
[追悼]	
追悼 柳父圀近先生	
千葉 眞	9
中谷猛先生を偲ぶ	
寺島俊穂	11
風のように広がる——追悼 犬塚満さん	
川出良枝	12
[書評]	
建築は政治理論の新たな問いになり得るのか？：政治制度としての建築・建造環境 ——Duncan Bell and Bernardo Zacka (eds.), <i>Political Theory and Architecture</i> を読む	
村田 陽	14
[会務報告]	
2025 年度第 2 回政治思想学会理事会議事録	17

2026 年度研究大会企画について

研究企画委员会主任 犬 塚 元（法政大学）

大会の企画趣旨

2026 年度研究大会の統一テーマは「政治思想における世代」です。

今回の研究大会は、なにより、若い世代の会員、研究歴の浅い会員がこれまで以上に本学会の活動に積極的に参画できることをめざして、準備が進められました。企画案を検討・立案する研究企画委員会（企画委員会）の人選においても、若い世代の意見や知見をできる限り反映できるよう、委員の半数を理事会構成員以外から選び、乙部延剛、上村剛、河村真実、内藤葉子、濱野靖一郎、柳愛林の各会員に今年度の委員をご担当いただきました。こうした方針は、学問の世界においても世代交代を積極的に進めるべきであり、学会の運営や活動にはいままでも以上により若い世代の会員が関与したほうが望ましいのではないか、という委員会主任の判断にもとづくものです^(注)。1994 年に開催された本学会第 1 回研究大会の統一テーマが「政治思想史の現在——新世代からの発信」であったことをふまえますと、こうした方針は、「新世代からの発信」という創設時の理念（マキアヴェッリのいう「第 1 原理」）に立ち返るものでもあります。

こうした方針に沿うかたちで、2026 年度研究大会の統一テーマは「政治思想における世代」とし、ひろく「世代」にかかる 이슈について政治思想研究の見地より探究する企画を立案しました。すなわち、この「政治思想における世代」という統一テーマには、(1) 世代をめぐる政治思想や政治理論（世代間正義、世代間の対立と対話、世代論・世代語り、人口問題や少子高齢化や老いや環境問題などにかかる政治思想や政治理論）というテーマに加えて、(2) 政治思想の世代・世代

交代（政治思想・政治理論の歴史的変遷やパラダイム転換）や、(3) 政治思想研究の世代間対話や世代交代、というテーマも含意されています。言い換えれば、今回の統一テーマにおける「世代」は、政治共同体における世代、政治思想における世代、政治思想研究における世代、という三層の意味を表現するキーワードです。

今回の研究大会では、創設時の理念にもとづいて若い世代の参画を活性化して世代間のバランスを適正化しようとしただけでなく、加えて、これまでの研究大会の足跡を継承し、あらゆる人選において出身校、専門分野（政治思想・政治哲学、日本政治思想、西洋政治思想）、ジェンダーの偏りができるだけ生じないように留意しました。日本政治学会などでは、「マネル」（登壇者が男性ばかりの企画）を避けるべきことが徹底されている点をふまえると、本学会においても多様性の確保に向けて、こののちは、公募パネルの募集要領などでも、より意識的な取り組みが必要になるかもしれません。また、人選にあたっては、本学会の研究大会に登壇した回数の少ない会員をできるだけ抜擢できるよう努めました。

もうひとつ、今年度の研究企画委員会が意を注いだのは、質疑応答やディスカッションを充実させることです。学会大会や学術集会では、複数の報告者のプレゼンテーションだけでほとんどの時間を消化してしまい、質疑応答やディスカッションの時間がほとんど残らない、という会合運営がしばしば観察されますが、これは、さまざまな知見や研究成果をそなえた研究者が一同に会するチャンスなのに大変に勿体ないことのように思われます。幸いにして、本学会の研究大会では、事前に報告者にフルペーパー（やそれに準じるもの）をご提出いただき、大会前にオンライン配布されることになっていますから、大会参加者は、事前

に報告内容にアクセスすることができます。そこで今回の研究大会では、シンポジウムにおける各報告の時間はできるだけ短くして(10分～20分)、討論者による問いかけ、登壇者の相互対話、フロアとの対話のための時間をできるだけ長く確保することとしています。大会に参加される会員のみなさんには、この点をふまえて、事前にペーパーにアクセスして準備をお願いいたします。

各シンポジウムの企画趣旨

2026年度研究大会でも、近年の大会と同じように、統一テーマをふまえた3つのシンポジウムを開催します。

第1日目の冒頭を飾るシンポジウムⅠ「政治思想研究の現在」は、新進気鋭の若い世代の会員に登場してもらい、ご自身の研究成果を交えながら近年の研究動向を紹介してもらう研究サーヴェイのセッションです。研究の最前線に触れることのできるこのシンポジウムⅠでは、新しい世代の研究者がどんな課題に取り組んでいるか、研究の世代交代がどのように進展しているか、を確認することができるでしょう。

第1日目の午後第2枠に開催するシンポジウムⅡは、『政治思想研究』の四半世紀——2つの座談会「日本における政治思想研究の現状と課題」を振り返る」と題して、多人数の会員が登壇するラウンドテーブル形式で開催します。本学会の学会誌『政治思想研究』は、四半世紀を越えて、会員の重要な研究成果を数多く発信してきました。その四半世紀の歩みをたどってみますと、問題関心や研究手法のトレンドの変化を観察することができますが、他方では、四半世紀にわたって変わらずに継承されているものもありそうです。このシンポジウムⅡでは、生まれてまもない『政治思想研究』に掲載された2つの座談会記録(創刊号掲載の「日本における西洋政治思想研究の現状と課題」、第2号掲載の「日本における日本政治思想研究の現状と課題」)をいまあらためて振り返ってみることを最初の手がかりにして、それ以降の学会・学界の歴史も視野に入れながら、学会や研

究の継承や変化、学会・学界における世代などについて、世代間対話を試みる企画です。このシンポジウムには、学会代表理事の司会のもと、座談会に参加していた世代の会員と、中堅・若手の会員に登壇いただきます。参加される会員のみなさんには、ぜひとも、事前に2つの座談会をあらためてお読みくださいますようお願いいたします(J-STAGEに掲載)。

2日間のプログラムを締めくくるシンポジウムⅢは、「政治思想・政治理論における世代」と題して、「世代」や関連するイシューについて政治思想・政治理論がどのように論じてきたか、論じるかを正面から検討する企画です。ここには、「政治思想における世代」という統一テーマを掲げる研究大会の大切にふさわしい3つの報告が並びます。このシンポジウムⅢでは、三層の意味における世代について検討することを通じて、政治思想研究の意義や社会的貢献についてもさまざまな示唆が得られるはずです。

各分科会の企画趣旨

今回の研究大会でも、公募パネルと自由論題報告の応募をおこないました。厳正な審査を経て、最終的には、公募パネルについて2件、自由論題報告について7件が採択されました。それぞれにおいて充実した研究成果が披露されます。応募くださいました会員のみなさんに厚く御礼申し上げます。

さらに今大会では、新たな試みとして、研究企画委員会企画の企画セッションを2つ開催します。

従来、大会第1日目午後の第1枠では、海外より研究者を招聘して国際シンポジウムが開催されてきました。しかし、招聘講演型の企画の是非をめぐっては学会内にさまざまな意見があり理事会でも議論がなされたという経緯や、学会外での国際学術交流の機会が近年では増加していることなどをふまえて、2025年度に続いて今大会でも、国際シンポジウムの開催は見送ることとしました。その代替措置について、研究企画委員会では

さまざまな意見が語られましたが、結論としては、(次年度以降の企画を拘束しないというかたちの)新たな試みとして、委員会が複数の企画セッションを用意することとしました。従来型のシンポジウムでは扱いが難しかった内容・形式の企画を採りあげること、複数会場に分かれての小規模・中規模の集まりで会員間の対話や交流を促進することが、こうした形式の分科会を設置したねらいです。

企画セッションA「領域を越える政治思想研究」は、近年さかんに論じられるようになった「比較政治思想」という手法やサブディシプリンをふまえての企画です。政治思想研究はながらく、西洋政治思想史、日本政治思想史、政治理論の3領域が中心となって研究が推進され、本学会の企画でもこの分類が踏襲されてきました。このような分業体制によってそれぞれの専門分野の発展が大いに促されたことに疑いはありませんが、他方、領域相互間の協業や対話は十分であったか、さらには、日本以外の非西洋圏の政治思想、マイノリティの政治思想、従来の枠組みには収まりきらない思想など、3領域の外部や周辺に位置する領域の研究は十分であったか、と問うことができるでしょう。そこでこのセッションでは、乙部延剛委員の運営・進行のもと、従来の領域に収まらない研究対象や研究アプローチを採る若手の研究者に登壇いただき、そうした研究が政治思想研究をどのように拡張、変容させていくかを考えます。

企画セッションB「政治思想研究のアウトリーチを考える——社会的発信の新しいかたち」は、わたしたちが従事する現在の政治思想研究の成果をどのように社会に向けて発信していくか、専門分化が著しい現在の研究をSNSの時代にいかに関し発信して社会に還元していくか、を考える企画です。かつて政治思想研究者は、論壇誌や新聞を通じて、政治についての学問的な知見を社会的に発信するという役割を積極的に担ってきましたが、政治学の学問像や研究者の社会的地位やメディア環境が大きく変化した今日では、政治思想の学問的発信は、かつてに比べてはるかに難しくなっ

ているように思われます。そこでこのセッションでは、学問と社会を取り結ぶようにさまざまなかたちで社会的発信を実践している非会員のゲストをお招きし、上村剛委員の運営・進行のもと、政治思想研究はいまどのように社会に向けて語りえているか、今後どのように語りうるかをともに検討します。

研究企画委員会の委員のみなさん、理事会・事務局・開催校のみなさんのお力添えを得て、そしてなにより、報告者・討論者・司会者として登壇くださるみなさんのご尽力のもと、以上のようなとても充実した内容の研究大会のプログラムを用意できたように考えています。ぜひとも、さまざまな世代の多くの会員のみなさんに、会場の成蹊大学にご参集いただき、二日間にわたる知の祭典をともに作りあげていただきますようお願い申し上げます。

(注) 2000年以降の本学会理事会構成員(理事・監事)の平均年齢や年齢構成は、次ページの表1のとおり。理事会構成員の平均年齢は、変動はあるがこの期間を通じて50代で一貫している。今回このような調査を実施してみたのは、1971年生まれのわたしの前後の世代(1965年～1974年生まれ)は、理事会において長期にわたって過剰代表されているのではないかと、この印象を抱いていたことが一つの理由である。このデータからは、相対的に見て早い段階から若くして理事会に加わってきた年代、相対的に多くの理事会構成員を輩出してきた年代があることが読み取れるように思われる。

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
年齢平均値	54.5	55.2	56.2	54.2	55.2	54.7	55.7	54.6	55.6	53.4	54.4	52.2	53.2	50.5	51.5	51.7	52.5	52.5	52.3	53.1	53.6	54.1	55.1	54.2	55.2	52.9
年齢中央値	54.0	55.0	56.0	55.0	56.0	56.0	57.0	56.5	57.5	54.5	55.5	52.0	53.0	50.0	51.0	52.0	52.5	52.0	52.5	53.0	53.5	54.5	55.0	56.0	54.5	
標準偏差	5.1	4.6	4.6	5.1	5.1	4.5	4.5	6.2	6.2	6.7	6.7	6.6	6.6	5.8	5.8	5.4	5.3	5.2	4.5	4.5	4.6	4.4	4.4	4.8	4.8	6.2
平均生年	1945.5	1945.8	1945.8	1948.8	1948.8	1950.3	1950.3	1952.4	1952.4	1955.6	1955.6	1958.8	1958.8	1962.5	1962.5	1963.3	1963.5	1964.5	1965.7	1965.9	1966.4	1966.9	1966.9	1968.8	1968.8	1972.1
1935-39	4	3	3	1	1																					
1940-44	4	4	4	4	4	1	1																			
1945-49	12	15	15	14	14	16	16	14	14	10	10	3	3													
1950-54	4	3	3	5	5	5	5	7	7	8	8	7	7	4	4	2	2	2								
1955-59				5	5	7	7	7	7	8	8	8	8	7	7	7	7	5	4	4	3	2	2			
1960-64										6	6	6	6	9	9	9	9	8	9	9	9	8	8	7	7	2
1965-69								1	1	3	3	5	5	6	6	8	9	11	11	11	11	12	12	12	12	11
1970-74								1	1	1	1	2	2	5	5	5	5	6	6	7	7	8	8	8	8	7
1975-79																			1	1	2	2	2	5	5	9
1980-84																										2
1985-89																										1
理事会人数	24	25	25	29	29	29	29	30	30	36	36	31	31	31	31	31	32	32	31	32	32	32	32	32	32	32
男女比	24:0	25:0	25:0	28:1	28:1	28:1	28:1	27:3	27:3	32:4	32:4	27:4	27:4	27:4	27:4	27:4	27:5	28:4	27:4	28:4	28:4	28:4	28:4	28:4	28:4	25:7

表１ 2000 年以降の政治思想学会理事会構成員（理事・監事）の平均年齢・年齢構成の推移

集計方法：『政治思想研究』各号の末尾の名簿に掲載されている理事会構成員（理事・監事）を、その発行年 1 月 1 日現在の理事会構成員とみなしたうえで、公開情報にもとづいて生年を特定して各理事会構成員の満年齢を計算した（全員の誕生日が 1 月 1 日であると仮定して 1 月 1 日現在の満年齢を計算）。例えば、1935-39 は、1935 年から 1939 年までに生まれた理事会構成員の数を示す。平均生年の小数点以下は 10 進法の数値である。

2026 年度政治思想学会研究大会プログラム（予定）

日程：2026 年 5 月 23 日（土）・24 日（日）

会場：成蹊大学（東京都武蔵野市）

統一テーマ：政治思想における世代

◆5 月 23 日（土曜）

9：30 ～ 受付

10：00～12：00 シンポジウム I：政治思想研究の現在

司会：内藤葉子（大阪公立大学）

報告：大久保歩（東京外国語大学）「ニーチェ「政治思想」研究の現在」

牧野正義（九州大学）「現代政治理論の動向とシティズンシップ——ハーバーマスの討議理論を手がかりとして」

常瀟琳（筑波大学）「日本政治思想史における「情」と「理」をめぐる研究の現在」

討論：速水淑子（東京大学）

尾原宏之（甲南大学）

12：10～13：10 休憩／理事会

13：20～15：20 研究企画委員会企画セッション／公募パネル

①企画セッション A：領域を越える政治思想研究

司会：乙部延剛（大阪大学）

報告：稲垣健太郎（山口大学、非会員）「東洋学者たちが見たオスマン帝国——レヴィヌス・ヴァルナー（d. 1665）の事例」

苗婧（島根県立大学）「「理勢」論の近代中国における展開——郭嵩燾の西洋認識を手がかりに」

崎濱紗奈（東京大学、非会員）「「政治」はいかにして表出可能か——沖縄という場から考える」

エリス直美（カリフォルニア大学大学院、非会員）「敗戦国から問う、民主主義の普遍性——「八月革命」説の可能性と限界」

討論：大久保健晴（慶應義塾大学）

②企画セッション B：政治思想研究のアウトリーチを考える——社会的発信の新しいかたち

司会：上村剛（関西学院大学）

登壇：石田健（起業家、ジャーナリスト、ニュース解説メディア「The HEADLINE」編集長、非会員）

岡山義信（有斐閣、非会員）

中野亜海（日経 BP、非会員）

③公募パネル A：社会契約をめぐる政治思想

司会：村井洋（島根県立大学（名誉教授））

報告：佐藤高尚（日本大学）「アダム・スミスの社会契約論理解とその展開」

川口雄一（成蹊大学）「南原繁の政治哲学における「社会契約論」認識とその克服——カント、フ
ィヒテをめぐる議論を手がかりとして（仮）」

15：40～18：20 シンポジウムⅡ：『政治思想研究』の四半世紀——2つの座談会「日本における政治思想
研究の現状と課題」を振り返る（ラウンドテーブル）

司会：安武真隆（関西大学）

登壇：渡辺浩（日本学士院） 齋藤純一（早稲田大学） 田村哲樹（名古屋大学）

趙星銀（明治学院大学） 松尾隆佑（宮崎大学） 李東宣（東京都立大学）

18：20～18：40 総会

18：50～20：50 懇親会

◆5月24日（日曜）

9：00～ 受付

9：30～12：20 自由論題報告／公募パネル

①第一会場

9：30～12：20 自由論題報告

司会：島田英明（東京都立大学）

報告：9：30～10：20 染矢奈樹（慶應義塾大学大学院）「明治初期日本の主権論とドイツ国家学——J・
C・ブルンチュリ『一般国法学』を中心に」

10：30～11：20 池上広亮（東京大学大学院）「保守の曙光——『明治日報』の「保守」について」

11：30～12：20 田淵舜也（慶應義塾大学大学院）「文系理系論争のゼロ地点——学長ヴィルヘル
ム・ヴィンデルバントとドイツ帝国」

②第二会場

9：30～12：20 自由論題報告

司会：川上洋平（専修大学）

報告：9：30～10：20 村田陽（京都大学）「J. S. ミルとジョージ・グロートによる植民地論——古代ギ
リシア擁護論との関連において」

10：30～11：20 赤海勇人（東京大学大学院）「アソシエーションイズムとリパブリカニズムの統一
としてのマルクスのパリ・コミューン論」

11：30～12：20 齋藤昂矩（法政大学大学院）「ジャック・ランシエールにおける政治的なもの」

③第三会場

9：30～11：30 公募パネルB「エートスから見る政治理論」

司会・討論者：山岡龍一（放送大学）

報告：佐藤竜人（東京大学）「エートスを持たない人々？——ウィリアム・コノリーのエートス論につい

て」

矢端崇（国際基督教大学大学院）「恐怖のリベラリズムにおける自己信頼」

濱野倫太郎（慶應義塾大学大学院）「〈エートスについて語る〉政治理論の可能性——一つのモデル・ケースとしてのバーナード・ウィリアムズ」

11：30～12：20 自由論題報告

司会：田畑真一（北海道教育大学）

報告：11：30～12：20 仲井間健太（立命館アジア太平洋大学）「自尊に基づく卓越主義的寛容論とその検討」

12：30～13：40 休憩／理事会

13：40～14：00 総会

14：00～16：40 シンポジウムⅢ：政治思想・政治理論における世代

司会：柳愛林（九州大学）

報告：田中豊（関西学院大学）「允に厥の中を執れ——元田永孚と中江兆民の政治構想」

遠藤知子（大阪大学）「社会構造上のプロセスとしての関係の平等——世代間正義の視点から」

蛭田圭（早稲田大学）「政治理論はまだ存在していたのか——バーリン、ロールズ、「政治哲学の死」」

討論：河村真実（東北学院大学）

濱野靖一郎（島根県立大学）

*大会会場に託児所の設置はありません。研究大会に参加するために一時保育を利用した会員には、利用料を補助します（お子さん一人あたり5,000 円の利用料補助）。事前申請が必要です。

*非会員は参加費1,000 円で聴講できます（報告資料にアクセス可）。

◆一時保育への補助について

2025 年度研究大会から引き続き、今年度の研究大会においてもお子さんをもつ会員の大会参加支援のため、大会に参加するために一時保育を利用された会員への補助を行います（お子さん一人あたり 5,000 円）。補助を希望される会員は2026 年5 月10 日（日）までにお申し込みください。

申込方法

- (1) 2026 年5 月10 日までに、事務局(jcsptoffice@gmail.com) まで以下の必要事項を記載のうえ、メールでお申し込みください。必要事項は、会員氏名、所属、住所、電話番号、預けるお子さんの年齢・人数、保育サービスを利用する日時、利用する保育サービス施設ないし業者等の名称・所在地（ウェブサイトがある場合はURL）です。メールの件名は【大会保育補助希望】としてください。
- (2) 利用日（学会当日に限る）の日付と宛先（会員氏名）が記載された領収書（または請求書・明細書などサービス利用を証明できるもの）を大会受付に提示し、支払いを受けてください（当日に領収書等の提示が難しい場合は個別にご相談ください）。

注意事項

- ・ (1) の申し込みがなされていても、領収書（ないしは請求書・明細書）の提示がない場合にはお支払いができません。
- ・ 学会から補助できるのは、有料の保育サービスを利用した場合に限ります。友人や親族等による預かりには適用できませんので、ご了承ください。
- ・ 予算に限りがありますので、なるべく早くお申し込みください。

追悼 柳父圀近先生

千葉 眞（国際基督教大学名誉教授）

柳父圀近先生（1946年1月19日のお生まれ）は、癌の転移が見つかり、昨年末に緊急入院されておりましたが、本年2025年2月18日にご逝去されたという悲報を受けとり、愕然といたしました。昨年6月の内村鑑三研究会（ご自身も2015年から2022年まで編集委員をおつとめでした）主催の研究セミナーにも参加されており、いつものお元気な発言もされておりましたので、耳を疑いました。かほる夫人のお話でも、前立腺癌をかかえておられたものの、昨年秋まではお元気でいられたとのこと、ご永眠はにわかには納得できませんでした。

柳父さんは1976年に一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、その後、青山学院女子短期大学で教鞭をとられ、1987年に東北大学法学部助教授、1988年に教授、さらに1997年に東北大学法学部長をお勤めになられ、2010年に定年退職されました。その後に東北大学教養教育院特命教授を経て、名誉教授になられました。先生の専門分野は広く、社会思想史、経済思想史から政治思想史へとまたがる分野に精通されておりました。若き日からマックス・ウェーバー、エルンスト・トレルチなどに関して優れた著書や論文を公刊され、さらに内村鑑三と無教会の研究においても貴重な論文や著書を刊行されておりました。柳父さんは、政治思想学会の理事をお勤めになられ、さらに2004年にはご自身の東北大学において第11回研究大会を主催されております。

私自身は、三歳年下で弟分の立場で、いつも柳父さんと呼びし、しかし師事するような気持ちで接しておりました。そのような関係で40年以上にもわたる親しい交わりを頂戴してまいりました。柳父さんは政治思想学会の理事として長年ご尽力くださいましたが、同時に研究誌『内村鑑三研究』の編集委員を2015年から2022年まで7年

間お務めくださり、その際、楽しく編集などの仕事を一緒にさせていただきました。

柳父さんはいつもたいへん親切で相手の立場に立って発言され、また対応されているのに感銘を受けておりました。きっとご自分の学生、院生さんたちに対しても同じようなご指導をされ、接しておられたのではなかったかと想像いたします。告別式では仙台在住の佐藤司郎牧師が司式をしてくださり、東北大学での最初期の教え子のお一人、豊永敏久氏が弔辞を述べてくださいました。柳父さんとかほる夫人はお家を解放され、よく教え子の皆さんをお家でもてなし、学生時代、卒業後も親しい交わりをお持ちだったようです。たんに学問上の師弟関係というよりは、生涯の友人として接しておられたことを知り、やはり柳父さんらしいなと感銘を深めた次第です。

柳父さんとは個人的に時おりお会いし、長電話でお話をし、また「キリスト教と天皇制研究会」や数人のインフォーマルな会合で彼独自の考え抜かれた話をよくうかがいましたが、それはつねに大きな学びでありました。柳父さんは政治学的には丸山眞男先生、経済学では大塚久雄先生と中村勝己先生を尊敬し師事されており、先生方と貴重な交わりを持たれておりました。ある時、大塚先生をお訪ねするけれど、「千葉さんも来る？」と誘われ、ご同道し、楽しい訪問と語らいを持たせてもらったことが思い起こされます。

柳父さんの研究は海外の思想家や論者については、マックス・ウェーバー、エルンスト・トレルチ、カール・バルト、パウル・ティリッヒなど、また日本の思想家では、内村鑑三、矢内原忠雄、大塚久雄、丸山眞男とその影響下にある方々に焦点が当てられており、きわめて魅力的で貴重な思想史的研究を積み重ねてられました。東北大学では、宮田光雄先生のご指導の下、お仲間の研究

者たちと一緒に共編著『ナチ・ドイツの政治思想』（創文社、2002年）を執筆されております。その他、また単著としては『ウェーバーとトレルチ』（みすず書房、1983年）、『エートスとクラトス』（創文社、1992年）、『政治と宗教——ウェーバー研究の視座から』（創文社、2010年）、そして『日本のプロテスタンティズムの政治思想——無教会における国家と宗教』（新教出版社、2016年）など、力作を次々と刊行されました。私たちの世代だけでなく、後継の方々の世代に柳父さんが残してくださったこれらの著作は宝物です。

柳父さんとは私は複数の研究会で一緒にいたしましたが、そのなかでも今でも深い印象が刻まれていますのは、2011年から2016年にいたる5年にわたって、科研（科学研究）の「天皇制とキリスト教研究会」に共に参加させてもらったことです。この研究会は土肥昭夫先生と奥平康弘先生によって先鞭を付けられ、柳父さんの他、横田耕一、遠藤興一、石井摩耶子、吉駒明子、伊藤彌彦、渡辺祐子、島蘭進、星野靖二、豊川慎、齋藤公太といった諸先生など十数名からなるグループで、20回を超える研究会（研究合宿を含む）を行いました。その成果は、一つには吉駒明子・伊藤彌彦・石井摩耶子編著『現人神から大衆天皇制へ——昭和の国体とキリスト教』（刀水書房、2017年）でした。本書の第12章で柳父さんは、「戦後初期「無教会」にとっての「象徴天皇制」——肯定と批判の意識の交錯」という題名の文章を著されました。この興味深い啓発的な論考は、無教会の戦後の伝道者たち三世代（aグループ、bグループ、cグループ）を取り上げ、これら三世代の天皇制への姿勢の異同ないし変遷を取り上げたものです。aグループは内村の年長世代の弟子たち、つまり塚本虎二（1885年生まれ）、黒崎幸吉（1886年生まれ）、高木八尺（1889年生まれ）、南原繁（1889年生まれ）、矢内原忠雄（1893年生まれ）であり、彼らは戦前戦中の神権天皇制が否認されたことで戦後の象徴天皇制に対しては好意的な姿勢を示したと指摘されています。またbグループは塚本よりも10歳若い石原兵永（1895年生まれ）と15歳若い政池仁（1900年生まれ）

のお二人であり、年長世代に比べると、象徴天皇制への敬意は希薄であったとされます。さらにcグループは最晩年に内村に接した大塚久雄（1907年生まれ）と関根正雄（1912年生まれ）のお二人ですが、彼らはより鋭く天皇制のエートスを批判したと説明されております（前掲書、284頁）。

最近の動きについて、一点、お知らせしたいことがございます。柳父さんの下でかつて学ばれ、交流を育んだこれらの方々のあいだで、現在、柳父さんの遺稿集の出版の計画がもち上がり、出版社の選定も進みつつあるとのこと。これはgood news！ですね。

柳父さんに出会った人たちは、皆さん、柳父さんの誠実で温かなお人柄に強く印象づけられたのではないかと思います。私もその一人です。その語る言葉と発言、その態度と姿勢、その行動、それらはすべて柳父さんがどんな人であるのかを現し、開示してくれました。そしてそのお人柄からほとぼしる一言、一言、その態度から、そして柳父さんとの対話や問答から、人生だったり、学問だったり、いろんなことについて実に豊かな示唆と洞察をたくさん頂戴いたしました。柳父さんの出会う人たちすべてへの敬意の姿勢は、彼のほほえみ、語り、対応、助言などを通じて、周囲の私たちにも伝わってきました。柳父さんの御霊、安かれとお祈り申し上げます。

中谷猛先生を偲ぶ

寺 島 俊 穂 (関西大学名誉教授)

中谷猛先生が本年（2025 年）1 月 9 日に逝去されました。享年 89 歳。中谷先生は、トクヴィルを中心にしてフランス政治思想史を専門とされ、数多くの単著・編著および論文を公刊され、政治思想研究に多大な貢献をなされました。政治思想学会には創立当初から積極的に関わり、代表理事を務めた際には、学会誌『政治思想研究』の創刊（2000 年 5 月）に尽力されました。

また、1983 年 1 月から京都で政治思想読書会という研究会を主宰され、フランス留学期間を除いてご病気になるまで、ほぼ毎回出席され、後進の研究者と対等な立場で研鑽を重ねておられました。この研究会は、当初は毎月開かれ、西洋政治思想や日本政治思想の研究者の交流の場となり、先生の穏やかな人柄にも支えられて 300 回を超え、現在に至っています。

私の中谷先生と直接お会いするようになったのは、政治思想読書会においてですが、研究会活動をとおして先生から多くのことを学び、たいへん感謝しています。先生は、トクヴィル研究から政治思想研究を始め、『トクヴィルとデモクラシー』（御茶の水書房、1974 年）以来、時代状況のなかで思想を緻密に分析されるとともに、つねに現代を意識して研究を続け、デモクラシーやナショナリズムなど、現代の問題にも関心を持ち続けていました。また、西洋政治史にも造詣が深く、歴史内在的な視座も重視していました。

関西では各大学に政治思想の教員がいても一人か二人にとどまるため、政治思想読書会は、大学の枠を越えて政治思想研究者が交流できる貴重な機会になりました。この研究会は、土曜日の午後 2 時から 5 時まで 3 時間ほど、報告者は一人で、半分ほどを討議に充てる形式でしたので、いつも充実した議論が交わされました。ときには報告者と参加者のあいだで論争になることもありました

が、先生はいつも穏やかに議論を見守っていました。研究会終了後は、喫茶店で研究交流を深め、穏やかな時間を過ごすことができたのも、先生への深い信頼があったからだと思います。

先生は、この研究会を基盤にして編まれた『政治思想と平和』（昭和堂、1988 年）のなかで、政治思想研究者に「パトス知」、すなわち共感や想像力に基づく実践知の追究を期待していました。先生はまた、20 人の専門研究者が分担執筆した編著『概説西洋政治思想史』（ミネルヴァ書房、1994 年）を公刊されました。この書は 20 年以上にわたり教科書として用いられ、西洋政治思想史の代表的な概説書のひとつとなりました。

先生が学会活動や研究会活動を重視されたのは、自発的結社を重視したトクヴィルの思想とも通じると思われます。つねに他者を尊重し、対等な関係性のなかで、優しい面持ちで議論される姿が昨日のここのように思い出されます。

先生は退職後も研究を続け、晩年に再びトクヴィルに立ち戻り、『語りつぐトクヴィル——再生のための「デモクラシー」考』（萌書房、2017 年）を上梓され、トクヴィル政治思想の現代的意義を問い直されています。学問にとって大切なのは情熱と信念であることを、先生は研究者人生をとおして示してくださったように思います。

もうひとつ、忘れ得ない思い出となっているのは、個人的なことですが、私が公刊した本を謹呈すると、いつも丁寧に感想を書き送ってくださったことです。私自身、先生のことばにどんなに励まされたことかと思います。先生が学生や院生、研究者仲間を示した礼節と気遣いは、私たちが見習うべき態度だと思います。

先生は多くの方に敬愛され、その立ち居振る舞いが周りの人びとを感化する力をもった、稀有な研究者でした。ご冥福を心からお祈りします。

風のように広がる

——追悼 犬塚満さん

川 出 良 枝（放送大学・元政治思想学会代表理事）

長年にわたり本学会の学術誌『政治思想研究』の編集を担い、政治学・政治思想分野の数々の名著を精力的に刊行されてきた風行社の犬塚満代表が2025年8月29日に逝去された。享年73歳。入退院を繰り返しながらも、最後まで編集作業にたずさわられたとのことである。急なお別れに寂寥たる思いを抱くが、出版人としての生涯をみごとにまっとうされたのだと思う。心から哀悼の意を捧げたい。

犬塚さんが逝去されたあと、近しい関係にあった学会会員の間で、いかに犬塚さんが素晴らしい方であったかを競うかのように披露しあう機会があった。友達づきあいを重ねてきた先輩方を差し置いて追悼文を書くことに、いささか気後れもする。とはいえ、私自身、犬塚さんには大変お世話になった。犬塚さんと風行社が、本学会や政治思想分野の研究の発展にとっていかに大切な存在であったかを書き記すことで、せめてものご恩返しをしたい。

犬塚さんは1951年9月2日に生まれ、東京大学法学部で学ばれた。ご卒業後平凡社に入社し、百科事典の法律部門を担当された。1990年1月に満を持して風行社を創業。社名は、『論語』顔淵篇をふまえた「風行草偃」（元の表現は「君子の徳は風」）に由来する。（学知が）風のように静かに、確かに、広がっていくという思いをこめて命名されたとのことである。

政治思想学会と風行社の本格的なお付き合いは、2004年か遅くとも2005年頃からであろう。というのも、2006年刊行の第6号から『政治思想研究』は風行社が発行するようになったからである。それまでは学会の編集委員会が手作りで刊行していたのだが、書店での流通や図書館への導入の促進を期して、風行社への業務委託が始まった。つましい体裁の5号までの雑誌が、風行社刊

となるや、一気にスタイリッシュな装丁へと変貌をとげた。

私が理事の一員となったのも同じ年であった。2013年に編集主任となり、犬塚さんと編集作業をご一緒することになった。

そこでいきなり事件が飛び込んだ。創刊以来、そして今もなお、継続して出版助成を頂戴している財団法人櫻田會に対する謝辞が数号にわたり抜けていたことが発覚したのである。犬塚さんからの経緯の報告メールを読んで青ざめた。善後策を講じるための気の重いやりとりが続くなかで、「実務作業を続いて担当していながら、気づかなかったこと、私の責任は大きいと思います」とのメールを頂いた。そんなことはまったくないと、心の底から恐縮した。幸い、関係者が真摯に協力し、櫻田會も寛大にご対応下さり、ほっと胸をなで下ろした。

冷や汗をかく経験だけではなかった。犬塚さんはてきぱきと合理的に仕事を進める方で、執筆者と編集主任と風行社との間の役割分担や原稿やゲラの送付に関する段取りを見通しよく整理されておられた。主任になったご挨拶をすると、早速、作業工程指針を送ってくださった。おかげで業務は実にスムーズに進んだ。校正の戻しの依頼にすぐ対応したときには、「早い！＝小社では〔クルム伊達公子の〕「ライジング・ショット」と呼んでいます」とのお言葉も頂戴した。まさに、テニスのラリーのような楽しい編集作業であった（ちなみに当時、伊達公子氏は37歳にして現役復帰後の再挑戦のまっただ中にあった）。

もちろん、風行社と本学会との関係は、『政治思想研究』や同じく編集をお願いした『政治思想学会会報』（ニューズレター）に限られるわけではない。風行社の出版目録には、政治学や政治思想系の重厚な作品がきら星のように並ぶ。シリ

ーズ『政治理論のパラダイム転換』、叢書〈風のビブリオ〉におけるセンスの良いラインナップ、M.ウォルツァーやR.タックやD.ミラーの代表作の翻訳等、タイトルを見るだけでもわくわくする。『政治の発見』のような柔らかめのシリーズもあれば、ICU（国際基督教大学）の21世紀COEの成果もおさめられている。犬塚さんは博士論文の出版にも大変に熱心で、多数の若手がこちらでデビューを飾ってきた。

本学会や政治思想研究にとって、風行社がなくてはならない出版社であることについて、これ以上贅言は不要であろう。当初は法律学分野に力を入れておられたそうだが、代表自らが政治学・政治思想分野の面白さと意義を発見して、現在の陣容となった。網羅する範囲は広いが、犬塚さんの柔軟でありながらも厳しい審美眼が浮かび上がってくる。

私も『ルソーと近代』（永見文雄・三浦信孝・川出良枝編、2014年）を風行社から刊行して頂いた。ルソー生誕300周年を記念した国際シンポジウムの記録論集である。フランス語論文の翻訳を含む25本を収録したものだが、犬塚さんは辣腕を発揮し、シンポジウム開催後2年もたたずに出版にこぎつけた。三浦さんの発案で、神保町のすずらん通りにある「揚子江菜館」で打ち上げを催した。3名の編者とルソー研究者の西川純子さん、風行社からは犬塚さんと社員の伊勢戸まゆみさんが参加した。

心浮き立つ初夏の宴であった。大いに盛り上がり、その勢いもあって、国際シンポジウムの論文集のような、およそ売れそうにもない学術書を、どうして次々に出版して頂けるのですか、と問いかけた。犬塚さんはにっこり笑って、「大手の出版社は何人も人を雇って経営するので相当な収益を上げる必要があるけれど、うちの社は二人で全部担当するので、自分たちが生活できるだけの売り上げさえあれば大丈夫だからですよ」と豪快におっしゃった。伊勢戸さんがDTP（Desktop publishing）を担当しつつ、お二人の社内分業で編集・校正・組版まで行いうという「現場直結」体制により製作コストと日数をぎりぎりまで切り詰

めた結果、儲からなくても価値があれば出す、という理念が実現したというのである。良い企画ではあるけれど採算面で問題がある、と難色を示されることに慣れっこになった者にとって、これほど嬉しい言葉はない。

だが、それは同時に風行社のお二人にずいぶんやせ我慢をお願いしてしまったことを意味する。後に私が代表理事を務めた頃に犬塚さんが大けがを負われ、何ヶ月も療養されたことがある。その折にも、政治思想学会の仕事はとても楽しみなので、お任せ下さいとの力強いメールを頂いた。風行社のお二人のご厚意に甘えるばかりで、申し訳ない気持ちで一杯である。

亡くなられる前、犬塚さんは吉田書店の吉田真也社長と話し合い、風行社の経営を吉田さんに引継がれた。合併という形態ではなく、風行社と吉田書店との「協業」という新体制が発足した。犬塚さんは、一線は退くものの引き続き会長として、伊勢戸・吉田両氏とともに風行社を盛り立てていくおつもりだった。だが、経営体制の変更を関係者に報告する伊勢戸さんからのメールが送信された二日後に犬塚さんは旅立たれた。犬塚社長の経営者としての責任感に頭が下がる。

告別式に参列された方によると、ご葬儀には犬塚さんを慕う多くの学界関係者が参列し、多数の弔電が届けられた。謙虚な犬塚さんはお仕事のことをお身内に話すことはめったになかったようで、ご遺族にとっては犬塚さんの生前のご活躍ぶりを発見する機会ともなり、感謝して下さったとのことである。

去る9月には、神田猿樂町の風行社のオフィスが飯田橋の吉田書店のオフィスへと移転した。だが、感傷にふける必要はない。伊勢戸さんが吉田社長とタッグを組んで、必ずや新しい風行社を作り上げてくれるからである。思念や言葉が書物として形になり、多くの人に読まれ、また次の世代に読み継がれていく。春風が大地を吹き渡るように、犬塚さんが育んだ風行社の精神はこれからも着実に広がっていくと確信している。

建築は政治理論の新たな問いになり得るのか? : 政治制度としての建築・建造環境

——Duncan Bell and Bernardo Zacka (eds.), *Political Theory and Architecture* (Bloomsbury Academic, 2020)を読む

村 田 陽 (京都大学)

1941年5月、ロンドン大空襲によってウェストミンスター宮殿の庶民院議事堂が破壊された。英国議会の象徴的建造物を再建するにあたり、チャーチルは「われわれは建物を形づくり、やがて建物がわれわれを形づくる」と1943年に演説した。この一節は、建築が人々による構築物であると同時に、さまざまな力をもって人々に多様な働きかけを行うことを示唆する。

しかしながら、従来の研究において、政治理論と建築の繋がりを強調する分析は、断続的なものに限定されてきたと本書の編者ダンカン・ベルとベルナルド・ザッカは指摘する。ベルは、2019年度政治思想学会研究大会の国際シンポジウムに登壇したことでも知られる政治思想・国際関係論研究者で、ザッカは、公共政策において生じる規範的課題に取り組む政治理論家である。編者以外に15名の多彩な政治理論研究者が執筆に参加しており(共著含む)、ヤン＝ヴェルナー・ミュラー(第1章)、ロナルド・ベイナー(第5章)、ナンシー・L・ローゼンブラム(第6章)らが名を連ねる。

本書の特色は、政治理論の観点から建築を論じることにある。いわば、ここでは〈政治理論の問題として建築を扱う〉という新たな問いが設定される。この萌芽的な研究の狙いを明確化するために、本稿の前半では主に序論を参照し、政治理論が建築に対していかにアプローチできるのか、という本書全体に通底する問いを扱う。

ベルとザッカは、現代政治理論の営みには、「社会生活を統治する諸構造の問い直し」が含まれると考察する。ところが、社会生活を包摂する建築によって生み出される空間・環境、あるいは建築それ自体に関する関心は、総じて希薄であったと指摘される。編者によると、そもそも政治理論が、アーレントの「共通世界」が提起する「公共空間」や、ハーバーマスの「公共圏」論に代表

される言論空間に長らく関心を寄せてきた一方、「建造環境 (the built environment)」——「構築された環境」と訳すべきかもしれない——に関する研究は、さほど展開されていない(p. 1)。

したがって、本書の包括的な目的は、政治理論と建築という二つの異なる分野の対話を「再開 (resume)」させる試みである。なぜ「再開」であるのか。その意図は、古代ギリシアにまで遡ることで示される。ベルとザッカは、プラトンの『法律』が、建築・都市設計と他の基本的な社会制度を同等の次元で扱っていたことに着目する。実のところ、この先駆的なプラトンの視座は、古典古代以後の政治思想史において、断片的ながらも確認できる。すなわち、理論家たちは、過去の建築物や建造環境に対して、そこから連想される概念を象徴的に析出してきた。例えば、ギリシアのアゴラ＝民主的集会の場、パノプティコン＝強制なき権力、ツェッペリン広場＝全体主義、収容所＝常軌を逸した空間などである(p. 1-2)。

対して本書は、建築や建造環境そのものに再び光をあてる。ゆえに、次の二つの目的が掲げられる。(1) 建築を分析するうえで、さまざまな政治理論的アプローチがいかに重要であるのかを示すこと、(2) 法、政策、制度、規範、実践、想像的構成物 (imaginaries)、言説と並んで、建築もまた政治理論の研究対象として位置づけられるべきであると示すこと、である(p. 1)。

無論、社会・政治思想の分野で、建築や建造環境にすでに目を向けてきた哲学者は存在する(ベンヤミン、ルフェーヴルなど)。ただし、政治理論の一分野として、持続的かつ体系的に建築を分析するための学術的な枠組みは整っていない。かかる状況に鑑みて、本書は分析対象の選択肢を幅広く自由に設定し、建築それ自体を広義に捉える。すなわち、本書で建築とは、「建造環境」お

よび「その環境を形づくる役割を担う人々の思想や実践」を指す概念として定義される (p. 6)。

はじめにベルとザッカは、建築が政治的役割を果たすと考えられてきた三つの事例を紹介する (p. 3-4)。第一に、政治的意思決定の空間に関する思想である。前述の演説でチャーチルは、大空襲以前のレイアウト——向かい合わせに配置された議員席、議員定数よりも少ない収容規模の建物——に議事堂を復元することを支持し、右派と左派の政治的な対決を可視化させ、議会の活気や緊迫感を表現できる設計様式を擁護した。一方ロベスピエールは、1793年の演説で巨大な議事堂の建設を提案し、代表者が民衆の存在を直に感じ、民衆に対する自らの責任を自覚できる空間の創出を企図した。すなわち、チャーチルとロベスピエールの主張において、建築とは、建築物の内部に居る人々に影響を与え、人々の行動を導く媒介的機能を有するものと考えられている。

第二に、新たな建築物をつくるときに生じる、選択的な思想的営みである。代表例として、フランス革命期にサント＝ジュヌヴィエーヴ教会が、フランスの偉人たちを記念碑的に祀るパンテオンへと改築された過程が挙げられる。本書によると、「共和政の新たな象徴的存在」に位置づけられた偉人たちは、「公共の利益への揺るぎない献身を示した功績」によって、その名をパンテオンに刻まれた。そこでは、過去の偉人たちの不滅さ記憶し、表現するための建築手法が採用された。この事例は、新たな政治的方向性・価値を模索するとき、過去を振り返り、それを現在・未来へと繋げる思想に建築が支えられていたことを示す。

第三に、ル・コルビュジエの『建築をめざして』(初版 1923)を手がかりに、20世紀のモダニズム建築が紹介される。モダニズム建築は機能主義的であると評される一方、ル・コルビュジエは「建築の第一の義務とは、[……] 諸価値の見直し (revision) を引き出すことである」と記した。20世紀のモダニズムでは、無駄のない合理的なデザインや装飾が重視され、社会的地位の象徴を廃した建築が生み出された。その特色からは、「階級的・階層的な過去に縛られない社会」の探究を読み解

くことができる。つまり、モダニズム建築は、平等という新たな価値を促進する方法であった。それゆえ、編者は、建築が「支配的な政治文化を変革する手段」である可能性を提示する。

以上三つの事例に基づく、建築は「振る舞いを促し、行為に意味を付与するもの」「諸価値を象徴するもの」「政治的エートスを促進するもの」であることがわかる。したがってベルとザッカは、建築とは「政治制度」であり、言語と同様に「われわれを包み込む」特質を有すると主張する。ここに、建築を政治理論的に探究すべき対象に設定する妥当性が示される (p. 5)。

本書は、建築が有する政治的役割を考察するために四つのテーマ——体制、空間、都市基盤、主体性——を掲げる。以下、やや羅列的になってしまいが、論点の多様性と広がり伝えるために、各パート・各章を簡潔に概観してみたい。

第一部「建築と政治体制」は、「構築された環境」としての建築と政治体制の関係性を論じる。換言すると、ある都市構造は、特定の政治体制(権威主義、独裁、共和主義、民主主義)を促進するのか、ある建築様式・資材は、特定の政治的価値や原理を表現・象徴するのか、といった問いが検討される。第1章では、建築とそこで形成される環境が、不確実性に満ちた民主主義を促進し得る可能性が慎重に検討される。第2章は、ギリシアのポリスで築かれた市壁を対象に、アテナイの民主政の存続と繁栄を可能にした「壁」の作用を分析する。第3章は、プラトンと20世紀の建築・都市計画理論との比較を通じて、政治改革と建築的革新の繋がりを考察する。

第二部「政治空間の構成要素としての建築」は、建築がいかに社会的・政治的な世界を構成するかを問う。第4章では、個人と集団の仲介的役割を担う「中間空間」としてバルコニー論が分析される。第5章は、アーレントの政治哲学概念を手がかりに、それぞれの土地に特有の建造環境が、活動的シティズンシップを促すと考察する。第6章では、「日々の民主主義」を持続的なものにする社交性に焦点が当てられ、私的生活の背景を成す隣人関係をめぐる生活環境が検討される。

第三部「政治的基盤としての建築——統治性 (governmentality) と政治経済」では、都市のインフラ機能を中心に、現代の統治性や政治経済の問題が分析される。第7章は、J. G. バラードに着目し、モダニズム建築におけるユートピア的可能性と、監視社会を強化するディストピア的特徴の間にある緊張関係を指摘する。第8章では、フォーコーの統治性概念の再検討を通じて、現代の都市計画が助長する権力関係として、ビジネス、商業、居住といった機能別に形成される都市内の分離によって生じる、監視・管理システムの問題が提起される。第9章は、ジェイコブスによる『アメリカ大都市の死と生』(1961)の批判的分析を通じて、ジェントリフィケーションの負の側面を指摘し、モダニズム建築を再評価する。第10章では、「都市への権利」概念がリベラルな枠組みで批判的に検証され、都市の「潜在的な移住者」に対する不正義や差別の課題が論じられる。

第四部「建築の政治的行為主体性 (agency)」は、建築が持ち得る主体性・自律性の是非を問う。第11章は、新たなユートピア的空間の創出によって、現代資本主義の弊害に立ち向かうための代替可能性を示す。第12章では、破滅的状況 (catastrophe) を経験したのちの建築の役割を分析し、凄惨な歴史と向き合い、未来へ向けた想像力と記憶の「自由空間」の創出が探究される。第13章は、「慎み (modesty)」を建築的・政治的な徳に位置づけ、包摂と参加を促す建築環境を考察する。第14章では、建築の持つ象徴・装飾・感覚に着目することで、これらの要素が、人間と集団の行為に意味を与える媒体であると論じられる。そして本書は、建築における実践と政治理論の協働の必要性が問われる終章で締め括られる。

最後に、今後の進展可能性を述べておきたい。本書は、政治理論を用いて広義の建築を論じる意義を示したといえる。他方で、建築家に対して政治理論家が応答を行うことで、議論をさらに有機的なものへと昇華させることも可能であろう。その好例として、森川輝一「建築と政治、制作と活動——山本理顕『権力の空間／空間の権力』によって」『政治思想学会会報』(第41号、2015年)

が特筆される。また、日本建築学会の主力メディア『建築雑誌』では、特集「住まうことから制度を考える」(2015年8月号)が企画されるなど、建築学が政治に関心を寄せてきたことも確認される。本書が目指す二つの異なる分野の対話の「再開」は、細分化した学問領域を超えたところから始まるのかもしれない。

本書は、建築をたんなる建造物ではなく、それらを取り巻く環境にまで定義を広げたことで、実り豊かなものとなった。だが、その幅広い定義ゆえに、当該テーマの射程範囲をどこにまで見定めたらよいかには疑問が残る。そこで、さらに探究可能であると思われる問いとして、(部分的・間接的に本書が応答可能な側面を含むが、) 次の四つの視点を指摘しておきたい。

第一に、ジェンダー研究の視点である。ジェンダーの平等に関わる社会的な建築活動(例えば、女性主導で住宅環境の刷新に取り組んだ1980年代のスウェーデンにおける女性建築フォーラム(Kvinnors Byggforum)など)に注目することは、有益であろう。第二に、自然災害後の復興も重要な争点となり得る。第12章で負の遺産との向き合い方が提唱された一方、被災地の再建は、生活環境の回復や防災の強化のみならず、政治的再生や民主的統治に関わる問題である。第三に、植民地支配・帝国主義の帰結として生まれた建築が、ポスト・コロニアリズムにいかなる影響を与えたかを再検討することは肝要であろう。第四に、政治思想史が、建築に歴史的アプローチを試みることである。例えば、18・19世紀西洋の新古典主義の建築分析は、主に美術史や歴史学が専門とする一方、ギリシア・ローマの芸術的模範が、各時代・地域における政治的・哲学的な古典古代受容といかなる接点を持ち得るかの検討は、思想史研究の仕事でもあろう。

本書は、建築が政治理論にとって意味のある論点として成立するための道筋を鮮やかに提示した。各々の論点の深化を通じて、生存や個々の実りある人生、そして政治の基盤を成す建築・建造環境が、政治理論・政治思想研究の側からさらに注目されることに期待したい。

2025 年 12 月 20 日発行 発行人 安武真隆 編集人 川上洋平

政治思想学会事務局 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学法学部 山本圭研究室内

E-mail: jcsptoffice@gmail.com

会員業務（退会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送）

（株）アドスリー 〒162-0814 東京都新宿区新小川町5-20 サンライズビルⅡ 3F

Tel : 03-3528-9841 Fax : 03-3528-9842

学会ホームページ : <http://www.jcspt.jp/>